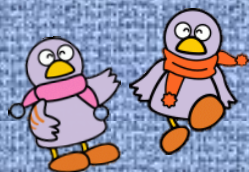


埼玉育ちのグローバル人



上海で街づくりに挑戦！

第1回 復旦大学留学編

森ビル(上海)有限公司 内村雅都さん



はじめまして。不動産デベロッパーの駐在員として、中国最大の都市・上海で街づくりの仕事をしている内村雅都うちむらまさとです。2012年8月に、復旦大学で企業派遣の留学生として中国での生活が始まってから、5年目の年を過ごしています。海外で働くことになったきっかけ、国際都市・上海の今、外国人と働いて日々感じることをエッセイに綴らせていただきます。

“街”そして“海外”に興味を持つ

私が今の仕事に興味を持ったきっかけは、生まれ育った埼玉に大きく関係しています。幼少期、父親が海外単身赴任をしていた関係で、よく祖母に面倒を見てもらっていた私は、実家がある浦和と祖母の実家がある隣町の大宮を行き来する生活を送りました。もともと幼少期は鉄道に興味を持っていたということもあり、県庁所在地なのにあまり発展していない地元の浦和駅前と、14の路線が乗り入れるターミナル駅を要し県下最大の商業都市として栄える大宮駅前の圧倒的な発展の違いに、街に対する興味と隣町・大宮への一方的な対抗心を持っていました。小学生の時から、市役所の都市計画課へ再開発の資料をもらいに行き、地図の上に自分の好きなように道路や鉄道路線を通し、区画整理をし、ビルの絵を描いては自分の好きな街を創作して楽しむという変わった小学生でした。小学校の文集で、「将来の夢は駅前に駅ビルを建てて街を発展させる」といった内容の文章を書いたのを覚えています。

一方で、父親の仕事の関係で埼玉を離れていた時期もあり、これが現在の海外での仕事に大きく影響しています。アラブ首長国連邦やアメリカ合衆国に住んでこともあり、広大な大地を車で移動して生活するという日本とは全く異なる街の風景を目の当たりにし、今まで自分が見てきた世界がいかに小さかったかということをお子ながらに思い知らされました。国・文化・宗教・自然環境そしてそこで生活する人によって、全く表情の異なる街の多様性を面白く感じ、もっと自分の知らない世界を見てみたいと海外に強い興味を抱くようになったのもまさにこの頃です。

その後、大学で地理学を専攻し、都市について勉強します。アルバイトでお金を貯めては海外旅行に飛び出す、国内や海外の街を訪れては、レポートを書くという何とも自分の興味とマッチした専攻でした。ちなみに十代の頃から行き始めた海外旅行は、社会人になった現在でも続けており、20代で世界50カ国・200以上の街を訪問。私の青春時代の時間とお金は、まさに世界中の街に消えていきました。



写真1：ネパールのバス停で

大学卒業後、「自分の手で街をつくりたい！日本でも海外でも街づくりをやりたい！」との想いで、東京で六本木ヒルズなどを開発、また上海では当時世界で2番目に高い超高層ビル・上海環球金融中心（492m・101階）の開発を推進していた森ビル株式会社に入社します。入社後は、東京都港区の再開発予定地内で小規模開発や物件の有効活用を行う業務に携わっていました。2008年に出張でオープンを間近に控えた上海環球金融中心を訪れる機会があり、上海の圧倒的な街のスケールや人々のエネルギーに衝撃を受け、海外で街づくりに挑戦したいという自分の気持ちに火が点き、会社の留学制度に手を挙げ、上海の復旦大学に語学留学します。

アジアを代表する国際都市・上海

私が住んでいるここ上海という街ですが、歴史の表舞台に出てきたのは比較的最近です。1842年にアヘン戦争によって締結された南京条約により、租界（外国人居住地）が設立され、中国進出の拠点として多くの列強が進出します。20世紀初頭には、東アジアの金融・貿易の中心として地位を確立し、中国最大の商業都市に発展しました。当時上海に進出していたのは欧米の列強だけでなく、10万人を超える日本人がここ上海で生活していました。

中華人民共和国の成立以降は、対外機能の喪失により国際社会における地位の低下が顕在化していましたが、1990年に上海の浦東新区に金融センターを開発するという国家プロジェクトが掲げられ、今再び東アジアの金融・貿易センターとして急速に発展しています。（写真2、3）特にここ20年の経済発展は目を見張るものがあり、1996年からの20年間で上海市のGDPは約9倍に成長し、世界中から最新の情報・モノ・金・知恵が集まる国際都市として、街だけでなく人々の生活も日々大きく変化しています。在上海日本総領事館

の調査によると、2016年現在約5万人の日本人が住んでおり、出張者や短期滞在者を含めると6~7万人が滞在していると言われ、世界でも有数の日本人が多く住んでいる街です。市内には高島屋、伊勢丹、大丸などの日系デパートをはじめ、3,000軒を超える日本食レストランもあり、日本人にとっては何不自由なく生活することができます。



写真2：1990年の上海



写真3：2016年の上海

復旦大学留学

2012年8月末、27歳で上海の街に降り立った私ですが、まずは復旦大学で半年間の語学研修という形で中国の生活をスタートさせます。中国語は、特に華僑の多いアジアにおいてビジネス言語として使う機会が多いと聞いていたともあり、若いうちに勉強しておきたいと前々から考えていた言語でした。その考えは、復旦大学留学初日に世界各地から中国語を学びに来ている大勢の留学生を見て、間違っていなかったと確信します。地域別で一番多いのは日本や韓国をはじめとしたアジア諸国からの留学生ですが、ヨーロッパ・アメリ

カナなどの先進国、また中国の外交関係を反映してアフリカや南米諸国からの学生も非常に多く、まさに小さな世界村がそこにありました。また世界中に散らばっている華僑の子供達も中国語と祖国の文化を勉強しに戻ってきており、卒業後もそのまま中国で働く人も多くいます。クラスメートの話によると、ハーバードやスタンフォードなど超一流 MBA スクールでも中国語を学ぶ企業幹部候補生が多いとのことで、国際社会における中国マーケットの重要性そして中国語の需要の高まりを改めて強く感じた瞬間でした。



写真4：授業での発表の様子

私が上海に渡った直後の2012年9月に、尖閣諸島の国有化を発端とした反日デモが中国各地において発生します。日本と同様に中国メディアもこの領土問題を連日ニュースで報道しており、日本人にとっては緊迫した雰囲気での留学になりました。上海の日本総領事館前でもデモが発生し、外出を控えるよう会社より連絡がありました。ただ実際に私が上海で過ごした肌感覚としては、私の周りの中国人はいつも通りの日常を送っており、TVで流れているニュース以外は特に反日感情を感じることはありませんでした。それどころか復旦大学の中国人学生や友人は、上海で新しい生活を始めた私に対して生活面や語学学習で多くのサポートをしてくれるなど、日中両国のメディアの過激な報道内容と現実の生活のギャップに違和感を覚えるほどでした。



写真5：授業風景

日中両国の関係が悪化したタイミングで始まった私の中国留学生活も、上海で知り合った友人の助けもあり順調に過ぎていきました。この尖閣諸島の一連の出来事は、国同士の政治問題とは関係なく、個人の間にはお互いの信頼の上で成り合っているということ、気付かせてくれました。

(第二回に続く)